

私は2013年10月から半年間、CanDoのインターンとして地域保健分野の活動のエイズリーダー研修に携わった。活動地となったミグワニ県では、36準区のうち、すでに25準区で研修が終了しており、私は残る11準区のうち8準区での研修の準備および実施に携わった。また、CanDoの活動終了後も研修修了者が継続して自分の住む村で地域住民に啓蒙活動を継続できるよう、フォローアップの会議を企画・開催した。NGOの活動はもとより、地域開発の運営を何一つ知らない私は、ケニアでのインターン活動を通してたくさんのことを学んだ。特に、HIV感染の治療および予後に関する自分の認識は時代遅れであるとともに、HIV感染・エイズを理解する視点も傍観的であったことを深く反省している。現地の人々と中期的に関わることで、自分のエイズの見方がどのように変化したのか振り返るとともに、NGOの活動の一端に携わったことで何を考えたかを振り返りたい。

まず、着任直後のオリエンテーションの場面で、「HIV感染・エイズは、性感染症と捉えるのではなく、社会問題として捉えなければならない」と言われた。その時はピンと来なかったのだが、活動を通してこの意味がよく分かった。エイズリーダー研修は、準区内で公平に選出された村民(参加者)に対し3日間にわたって行われる。参加者は、ケニア人の専門家からHIV感染・エイズの科学的知識を学び、復習とグループワークを通して理解度を上げ、HIV陽性者の差別や孤立の問題を検討し、さらに非感染者、感染者および感染者の家族など様々な状況にある人々にできるだけ誤解や危機感を与えない話し方を学習する。HIV感染・エイズの科学的知識では、ケニアにおけるHIV感染・エイズの歴史、統計、感染の背景に始まり、ヒトの免疫機能、原因や感染経路、感染後の経過、治療や予防方法などを系統的に学習し、さらに子どもたちの日常に潜むHIV感染の危険も考えていく。エイズは今のところ治らない病気ではあるが、エイズを発症しない限りは通常通りの生活が可能であることは私自身も理解していた。しかし、母子感染の危険性を考えると女性のHIV陽性者が子どもを持つことはリスクが高いため、諦めなければならないのではないかと私は考えていた。また、抗HIV薬を服用してもエイズを発症するのは時間の問題ではないかと、勝手に思い込んでいた。実際は、HIV陽性者であっても専門家の指導のもと、適切な体調管理とタイミング法でカップル間のHIV感染を回避でき、さらに予防的な薬物療法によって母子感染を回避できることを知った。また、抗HIV薬を処方通りに定期的に服用し、別の型のHIVへの再感染を予防できれば、HIVを保持しながらも天命を全うできることも知った。自分の知識が時代遅れだったことに気がついたわけだが、恥ずかしさよりもHIV陽性者の生き方に希望を感じるような嬉しい気持ちのほうが大きかった。

「HIV陽性であっても適切な行動を取れば、他の慢性病と変わらないほど怖がる必要のないウイルスなのだ」ということを理解する人が増えたら、HIV陽性者もその周囲の人々も前向きに生きることができる。しかし、前向きに生きる人を増やすには、より多くの人に正確な知識を持ってもらうだけでなく、適切な行動を取ってもらわなければならない。一番大事な行動がHIV検査を受

けることである。陽性か陰性かが分かることで、感染予防やエイズの発症遅延の手だてを講じることができるからだ。だが、検査するというシンプルな行為が地域住民には高い壁になっている。研修の参加者は、その理由を「HIV 陽性だったらどうしようという恐れのため、エイズ問題から目を背けているからだ」と答えていた。その恐れは、地域で身近な人がエイズで亡くなるのを目の当たりにした体験から来ているのだという。

さて、ミグワニ県では今も集団での男子割礼、女性性器切除といった伝統や無許可の産婆による自宅出産（国は禁止しているが）などの習慣が残っている。貧困からくる刃物や歯ブラシの共有があり、床屋では適切な消毒をせずにカミソリを使い回していた。さらに、貧困のために金品と引き換えに性行為をする青少年の例が各準区で見られた。また、小さな村社会でありながら配偶者以外の他者とコンドームを使わない危険な性行為をしている大人がたくさんいた。つまり、青少年から大人まで、様々な年代の人々が危険な性行為を体験し、全ての年齢の人が刃物等の共有によって血液感染の機会にさらされていた。住民にエイズの知識がなくても、危険な性行為が HIV 感染の一因であるということは広く知られているため、HIV に感染する機会があったかもしれない人々が検査に消極的になることは容易に想像がつく。また、HIV 陽性者およびその家族に対する偏見が今でもあるのだそうだ。さらに、HIV 陽性者の中には自暴自棄になり財産を手放した結果、生活していけなくなったり、エイズ孤児の親が残した財産を、横取りしようとする者が現れたりすることもあるそうである。そのような悲惨な状況を見聞きした地域住民が、保身のために HIV 検査を拒否する気持ちは理解できた。研修を通してこのようなことを知れば知るほど、オリエンテーションで言われた「エイズは社会問題である」という考え方に納得がいった。HIV そのものの性質と、貧困や習慣、無知や噂（もしくはデマ）、村社会の構造、行政の姿勢など、様々な要因のコンビネーションで問題が複雑化している。まさに、エイズは容易に解決できない社会問題なのだ。

ケニアでは HIV 検査、治療、妊婦検診、コンドーム、エイズ孤児や片親へのサポートなど、エイズ対策が無料で行われているのだが、うまく機能していないという。行政の力の入れかたに地域差があり、情報や物資、医療施設の整備が隅々まで行き渡っていない地域があることは残念なことである。早期発見が肝心であることを知ってもらい、さらに予防や治療、サポートという国民の権利を有効に利用してもらえるように働きかける活動は、HIV 陽性者だけでなく周囲の人々にも利益をもたらすと言える。そのきっかけとして、地域住民主体で情報発信できるシステムを作ることは意義があると感じた。CanDo は、エイズリーダー研修まで、初年度の公開学習会、2年目の基礎保健研修と3カ年計画で実施したわけだが、3年を要する背景を知り得たことも私にとっては大きな学びであった。特に CanDo は理念がしっかりと活動の基礎にされており、金銭を間に入れずに行政官と友好的な関係を形成すること、住民主体の流れを作ること、人的資源を最大限活かすこと、学習の機会など明らかに不足している部分や住民だけでは調達が難しいところにお金をかけること、活動が継続的に地域へ還元されること、それらを考慮しながら活動が進められていた。そのために、私が考えていた以上の時間と忍耐力が必要であった。今後は、エイズリーダー研修の修了者が、地域に戻って活発に啓発活動を行うことが期待されるわけだが、すぐには効果が現れないかもしれない。それでも、少なくとも参加者自身が研修で学んだことを日常生活で実践することで、徐々

に変化が生まれるのではないかと思う。そしていつか、この活動が HIV 陽性者を含めた地域住民の生きやすさにつながってほしいと思う。

研修中、参加者から様々な質問がでた。HIV 陽性者の性交渉や、HIV 陽性の親が子どもにそのことを伝えるタイミング、HIV 陽性の母親の授乳方法など、HIV 陽性者の日常生活場面での注意点に関することが多かった。これは、ケニアが「感染しないようにしよう」という段階にあるのではなく、「エイズは現実である」という段階にあるがゆえの質問ではなかったかと思う。実際、活動中に「私は HIV 陽性ですが、体調管理を心がけ元気に過ごしています」という研修修了者に出会った。私が人生で初めて出会った HIV 陽性者であり、エイズ問題は今ここにあるのだと思った瞬間であった。彼女は、夫が自分以外の女性と性交渉を持って感染し、その夫から感染したのだった。外見は健康そのもので、はつらつとした表情の彼女を見た時、HIV 陽性者であることが信じがたく、夫が感染源であることに憤りを覚えた。しかし、このことから、例えエイズの知識があっても行動に注意をして生活をしていても、感染を避けられない場合もあるということに私は気づかされた。

ケニアでの活動が進むにつれ、次第に日本でのエイズ教育が HIV 感染予防にばかり目が向いているのが気になった。まるで、日本には感染者がいないかのような教育ではないだろうか。しかし、実際には日本の HIV 感染者数は増えている。明日、もし自分が HIV 陽性だと分かったら、この先どうなるのかという不安が一気に押し寄せるはずだ。予防知識を与え、検査を促すだけでなく、もし HIV 陽性だとわかった場合、エイズ発症を遅延させるための日常生活の注意点を具体的に示し、最新の医療の情報を知ってもらうことも必要ではないだろうか。そして、HIV 陽性であっても家庭や仕事を諦めなくてよいということを広く知らせることが大事だと思う。日本がアフリカから学ぶことがあるとすれば、HIV 感染後の対策を理解し、HIV 陽性者とその家族が落ち着いて日常生活を送れるような情報の提供を普及させることだと思う。また、エイズ専門のカウンセリングの準備も必要になるかもしれない。

インターンの経験では、このような気づき以外にも、考えの多様性を受け入れるヒントを得たと思う。地域住民、現地スタッフ、インターンの仲間たち、CanDo のスタッフの皆さんなど、全く違うバックグラウンドを持つ人々と関わる機会が多かった。そのような人々との関わりの中で「自分の常識は世間の常識ではないし、正解にたどり着く方法は一通りではない」、そんな言い古されたことに共感する自分を発見した。そう思えることで、今までの自分の未熟な面が受け入れられ、これからも成長し続けたいという気持ちが湧いてきた。他にも、ケニア人の日常や生活の風景に出会ったこと、テロなどが身近な危険としてあること、電気や水のありがたさを知ったこと、不便な環境で工夫や発想の転換が生まれることなど、挙げたらきりがなく多くのことを考える機会となった。今後は、別のかたちで発展途上国の支援に関わりたいと考えるが、まずはインターンの時の経験を機会あるごとに身近な人に発信し、アフリカの動向に関心を持ち続けていきたい。